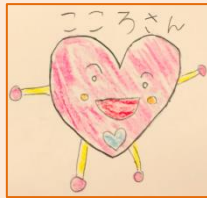


ココロさんの ひとりごと

2020年11月 No.15



ルビンの盃（さかずき）



ルビンの盃（さかずき）という図形があります。有名な図形なのでご覧になったことがあるかもしれません。中央に描かれた白い部分に目を向けると『盃（さかずき）』が見えますが、その両側にある黒い部分に目を向けると、『向かい合った2人の顔』が浮かび上がってきます。このような図形は、1つの図のなかに複数の見え方ができ、こういった図形は多義図形と呼ばれています。

図形であれば見え方には限りがあります。しかし、日常生活でのさまざまな出来事について考えてみると、そこに生じる「意味」は無限とも言えるほど多くの可能性を含んでいます。同じ出来事、同じ状況を前にしても、「その人にとっての意味」を考えたとき、各々が微妙に異なった見方や感じ方に気づかされます。日常の出来事は、人によっての意味が無限にあるという意味で多義的だと言えるでしょう。



さて、今年度は新型コロナウイルスの感染対策によって学校行事等が縮小や開催されないなど、喪失感や不全感を抱いている子どもが多いと思われます。しかしながら、その一方で、イベントが中止となったことに安堵や喜びを感じている子どもが少なからずいるのではないのでしょうか。そして、そうした思いは、どこか声にしづらく、時には「そんな風にはいけない」と自らの考えを否定しようとする子どもがいるかもしれません。



出来事が多義的であるならば、まずはその子が体験している世界から考えてみる、という姿勢が私たちに求められているように思います。例えば、私がルビンの『盃（さかずき）』を見ている間、その子は『向かい合った2人の顔』を見ているかもしれません。『盃（さかずき）』を見ている私にとっては、『向かい合った2人の顔』に気づくことは、難しいでしょう。しかし、「盃（さかずき）ではないかもしれない」という、見方や感じ方を私がしていたなら、子どもの「話してみてもいいかな」という思いが高まることもあるかもしれません。

世間での多数派の意見の中には、それにおおい隠されてしまっている少数派の声があるかもしれません。多様な見方や感じ方や考え方ができる大人たちの存在は、子どもたちが率直な思いを声にしやすい状況を生み出すように思われます。たとえルビンの盃（さかずき）が見慣れたものであったとしても、『盃（さかずき）』とも『向かい合った2人』とも異なる新たなものが見えないかと、好奇心をもって眺めてみたいところです。

